

O2-007

乳児院における新版K式発達検査
DQ高・低群とKIDS項目の関連

新宅可奈子

社会福祉法人四恩学園 四恩みろく乳児院

【目的】

当施設では、当施設に入所している子どもに対し、新版K式発達検査、KIDS（キッズ）乳幼児発達スケールなどを用いて発達状況を把握し、個々の発達に合わせた関わりをするように努めている。乳児院の入所児童の中で、KIDSの項目で不通過の項目があることが散見されたため、その結果と新版K式発達検査結果の関連について調べ、今回その結果を報告する。

【方法】

調査期間：2022年4月～2024年1月

質問紙：KIDS（キッズ）乳幼児発達スケールTYPE A（0ヶ月～11ヶ月）、TYPE B（1歳～2歳11ヶ月）

対象児：当施設に入所した乳幼児22人（平均月齢：23.14ヶ月）[男子：10人、女子：12人]

方法：新版K式発達検査とKIDS（TYPE A、TYPE B）の結果に対して分散分析を行った。

【結果】

新版K式発達検査（K式）のDQを高群と低群に分類し分散分析を行ったところ、K式DQの高・低群とKIDS-Aの指数と有意な差が（ $p < .01$ ）、Bの指数と有意傾向が見られた（ $p < .05$ ）。中でもKIDS-Aの方では、【運動】以外の

【操作】【理解】【表出言語】【対成人社会性】【食事】で有意傾向が見られた（ $p < .05$ ）。KIDSの各項目の平均値とK式DQの高・低群とで分析すると、10項目で両群に差があることが示唆された。例えば、【食事】領域で「空腹時に抱くと、口を動かして乳を欲しがる」が高群：1.00、低群：0.43（ $F(1,13)=9.24, p < .01$ ）で、低群では不通過であることが多いことが分かった。

【考察】

KIDSは一般的には親などの養育者が記入するため、その妥当性についてはしばしば議論されてきたが、今回の調査では過去の記録に基づき施設職員が二人以上で記入することにより、より客観性のあるデータを得ることができた。そして、2～3歳時に受けた新版K式発達検査結果と分析したところ、幼児期対象のKIDSのBよりも乳児期対象のAと有意な差があり、乳児期の発達が幼児期のDQに影響を及ぼすことが分かった。特に発達が緩やかな子どもにおいて、乳児期の段階で不通過になりやすい項目が明らかとなった。この不通過になりやすい項目について乳児期から注視しながら、その段階に合わせた関わりをすることで子どもの発達を促進していくことが大切と思われる。

O2-008

小学生の生活機能に日中の覚醒度が及ぼす
影響～同一コホートにおける縦断調査～滝澤 恵美¹、中山 智博²、大黒 春夏³、深谷 雅博⁴、
岩松 洋平⁵、市川 睦⁶、久保田 蒼¹、海野 潔美⁷¹茨城県立医療大学保健医療学部 理学療法学科²茨城県立医療大学保健医療学部 医科学センター³茨城県立医療大学付属病院 小児科⁴社会福祉法人清香会あゆみ園⁵総和中央病院 児童発達支援事業所はなもも⁶茨城県立医療大学保健医療学部 看護学科⁷茨城キリスト教大学看護学部 看護学科

【目的】

我々は児童の生活機能を「子どもの日常生活チェックリスト（QCD）」で調べて、性差があること、他の潜在要因があることを明らかにした（2024, 中山）。本研究は日中の覚醒度が関係すると仮説を立てて、QCD総得点に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象校はA町立A小学校（2023年度全校児童444名）であった。同意が得られた保護者に最近1ヶ月間の子どもの様子をQCDで回答してもらった。また、日中の覚醒度を「お子さんは日中に眠そうにしていることはありますか？」と尋ねて、“よくある”、“ときどきある”、“ほとんどない”で回答してもらった。本研究の分析対象者は、2022年度に1年生～5年生、2023年度に2年生～6年生であった294名（男児144名、女児150名）とした。QCD総合点を目的変数として、性別、学年、調査年、学年、日中の覚醒度、学年と調査年の交互作用を説明変数とする一般化線形混合モデル（GLMM）を実施した。変量効果として個人IDをモデルに組み込んだ。統計解析はSPSS Ver. 29（IBM社）で行い、有意水準は5%とした。本研究は茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号1060）。

【結果】

GLMMの結果、モデルの疑似決定係数は $R^2 = .700$ 、級内相関係数は $ICC = .616$ であった。固定効果のうち、有意だった説明変数は、性別（ $p = .008$ ）と日中の覚醒度（ $p < .001$ ）であった。調査年（ $p = .238$ ）、学年（ $p = .173$ ）、および学年と調査年の交互作用（ $p = .743$ ）は有意ではなかった。また変量効果も有意であった（ $p < .001$ ）。モデル式が推定したQCD総合点（平均点 ± 標準誤差）は、男児（ 40.4 ± 0.76 ）より女児（ 43.4 ± 0.74 ）が3点高く、日中の覚醒度別では「日中眠そうにしていることが」「よくある」（ 33.9 ± 2.2 ）、「ときどきある」（ 41.0 ± 0.80 ）、「ほとんどない」（ 42.7 ± 0.58 ）で覚醒度が高いほど得点が高かった。

【考察】

児童のQCD総得点に日中の覚醒度が影響することを明らかにした。QCD低得点者は、睡眠不足が背景にある可能性がある。生活習慣や社会性といった生活機能を改善のために、睡眠の評価や睡眠の改善を指導する必要がある。